

学び続ける集団をつくる 1年生2学期の定期テストデザイン

時期の特徴

行事や部活で忙しくなり、学習内容が難しくなることから、学習に気持ちが向かいはくくなる生徒が出現。学習を着実に進めている生徒との差が開き、成績下位層として固定化し始める。

指導のポイント

定期テストを学びに向かうきっかけに出来るよう、学年・教科団でテストの方針や設計を目線合わせする。クラスという集団性を生かしてテストを活用し、生徒の学習サイクルに組み込む。

※このコーナーは、高校の先生方との検討会を経て制作しております。

目的別データ活用

1 テストの狙いを 目線合わせし、 作問する

……→ 図1

◎定期テストの役割は、学習内容の定着度を測ることだ。だが、生徒の学力差が開き始めるこの時期は、定着度の確認だけで終わらせずに、各成績層の生徒が自信を付け、テスト後に意欲的に学習に取り組むきっかけとしたい。それには、成績中・下位層には「きちんと準備すれば点は取れる」ことを実感させ、上位層には「授業は大学入試と確実につながっている」ことを理解させることが必要だ。学年・教科団で成績層ごとの期待(想定得点)を踏まえて平均点を設定し、事前事後指導も目線合わせしながら、方針を決めて作問する。

2 狙いに合わせて 事前事後指導を 行う

……→ 図1

◎学年・教科団で作問の方針を目線合わせしたら、テスト前の指導を行う。下位層に自信を持たせることを重視するなら「小テストの中から〇割を出す」と予告し、復習に取り組ませてもよいし、上位層に対して「7月の模試の類題を1題出す」など、どこか見覚えのある初見問題を出すことを予告してもよいだろう。併せて、事後指導についても考えておきたい。テスト後に補習をするだけでなく、定期テストの内容を重要事項集として意識付け、次のテストに出すなどの方法もあるだろう。定期テストを単発の取り組みに終わらせず、年間の指導計画に位置付けたい。

対教師 への データ

作問と指導の観点を学年や教科で共有し
各成績層の学習意欲を高める

データを用いた指導の流れ

STEP 1

◎「定期テストの方針検討シート」(図1)を用いて、定期テストの作問担当者が中心となって、今回のテストの方針を提案する

STEP 2

◎学年団や教科団で、図1を基にテストの全体設計や事前事後指導を検討した上で、作問を行う

STEP 3

◎定期テスト前の指導を行う。学力層ごとの定期テストの意味付けに沿って、復習箇所を指示したり、テストでの目標を生徒に伝えたりする

STEP 4

◎定期テスト後の指導を行う。テスト前に計画したものを基に、予想以上に出来ていなかった部分を中心に復習などをさせる

◎テストの全体設計

大問番号	出題内容	配点	問題レベル別配点
1	L1 読解総合問題(客観式・記号多め・引用文長め)、小テスト	20点	難標準 5点 易 10点 5点
2	L2 読解総合問題(記述式・本文要約問題)、小テスト	40点	難標準 10点 易 20点 10点
3	L3 読解総合問題(記述式・引用文短め)、小テスト	30点	難標準 10点 易 10点 10点
4	小問集合形式で、模試の類題(初見問題)や小テストで解答率の低い問題	10点	難標準 5点 易 0点 5点

- ・学年全体の目標平均点 (55) 点
- ・成績層別の期待得点 上位層 (85) 点 中位層 (60) 点 下位層 (40) 点
- ・補習を必要とする点数 (30) 点未満

◎事前指導と事後指導

対下位層	事前	小テストをおぼて復習させる。 文法を中心に直しをできるように伝える。
	事後	単語・文法で間違えた生徒は小テストを再度受けさせ、 設定した合格点に到達するまで取り組ませる。
対中位層	事前	授業での説明を見直しように伝え、 不明点をなくしておくよう呼び掛ける。
	事後	授業で扱ったことで間違えた問題はノートを作らせ、 なぜ間違えたのかを考えさせる。ノートは担当がチェックする。
対上位層	事前	初出の英文に取り組む方法をおさらいしておくように伝える。
	事後	模試で間違えたところと比較し、自分の弱点を把握するように伝える。



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
<http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ (高校向け) > 生徒指導・進路指導ツール集

現場からのアドバイス (プラスαの指導)

下位層の底上げなしに上位層は育たないことを理解する

生徒の学力差が開き始めると、教師の意識は「上位層をどれだけ残すか」に向きがちだ。だが、現実には下位層が多くなった学年は入試に対して前向きにならず、上位層も最後まで戦い抜けない。上位層だけが引っ張るのではなく、中・下位層が脱落せずにしっかりと付いていく学年をつくることの重要性を、教師が共通理解しておきたい。

学年集会、朝学習などの「場」を効果的に活用する

テストの返却や事後指導、未定着だった部分の補習などの必要性を感じても、授業や放課後の時間には制約がある場合もあるだろう。そこで、学年集会の場を定期テストの振り返りの時間にしたり、朝学習の時間を成績層別に分けてテストの復習を行う時間にしたりすれば、時間の効率化と共に、学年全体で指導の足並みをそろえることにもつながる。

下位層への指導は個別に、手厚く行う

成績下位層の固定化を防ぐためには、個別の指導が欠かせない。家庭学習も生徒任せにせず、放課後の教室で教師の目の前で実際に取り組ませ、問題の解き方、ノートの書き方などをチェックし、具体的に指導する。下位層の生徒には、面談や朝学習を通して、「勉強の仕方」を伝えること、そして何よりも「自分を見てくれている」と感じさせることが重要だ。

目的別データ活用

1 テストの結果を活用する習慣を付けさせる

……→ 図2

◎定期テストの返却時、生徒は得点に一喜一憂しながら、「次のテストではしっかり対策したい」と意欲を持っている。その気持ちを具体的な学習計画につなげられるよう、テスト返却後すぐに生徒自身が結果を基に「何が悪かったのか、今後どうすればよいか」を言語化する場を設けたい。特に、事前に出題を告知されていたのに出来なかった分野や、テスト時には自信があったのに不正解だった部分があった場合、その原因は学習時間の不足か、取り組み方の問題かを徹底的に振り返らせる。この作業は、模試の振り返りの習慣化にもつながるだろう。

2 問題の解き方や勉強法を学び合うクラスにする

……→ 図2

◎大学受験に向けては「励まし合える」「努力する者を笑わない」集団づくりが重要だ。だが、そうした意識の醸成は、3年生になってすぐ出来るものではない。1年生から、学び合う雰囲気と学び合うことのメリットを実感させることが、入試にも立ち向かえる集団づくりの基礎となる。そこで、定期テストの答案返却時、解けなかった問題の解き方を教え合ったり、成績上位者の勉強法を聞いたりする場を設けたい。意欲が高まるこの時期を逃さずに、生徒同士の語り合いから、大きな気付きを得させたい。

対生徒
への
データ

定期テストの振り返りを通して
クラスを「仲間と学ぶ集団」にする

データ活用の流れ

STEP 1	STEP 2	STEP 3	STEP 4
◎定期テスト返却時に「定期テスト振り返りシート」(図2)を使って、まず個々の生徒に振り返りをさせる	◎自分が出来なかった問題を中心に、友だちに学習法を聞き、図2に記入させる	◎次の定期テストまでにどのような学習を進めればよいかを考えさせ、図2に記入させる	◎生徒が書いたシート(図2)を回収し、ポイントを押さえられているかを確認する。その後の学習の進捗確認として用いる

今回のテーマと関連する過去のバックナンバーも併せてご活用ください！ 右のウェブサイトをご覧ください。

- 2007年9月号「1年生夏休み明けの意識付け」
- 2008年10月号「1年生2学期の成績層別面談指導」
- 2009年9月号「1年生秋の中だるみ対策と『第一歩』としての文理選択」

Benesse® 教育研究開発センター

<http://benesse.jp/berd/>

生きたデータの徹底活用 クリック!

HOME→情報誌ライブラリ(高校向け)→
生徒指導・進路指導ツール集をご覧ください

加工可能な資料が
ダウンロードできます!

生徒指導・
進路指導ツール集

ウェブサイトから
ダウンロード!

() 年 () 組 () 番 名前：()

科目名：()

◎定期テストの結果を振り返ってみよう

結果は 目標を上回った 目標通り 目標を下回った

その理由は テスト前の学習スケジュール上の理由

テスト対策の内容面での理由

日々の予習復習方法などから見た理由

◎クラスメートに学習法を聞いてみよう ※出来るだけ、この科目が得意な人に聞こう（2人以上に聞いて内容を比較してもよい）

ふだんの学習内容、掛けている時間

テスト前の学習内容、掛けている時間

学習で工夫していること

◎上記を踏まえて、次の定期テストまでにどんな学習に取り組みたいかを書こう

担任コメント



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
<http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ（高校向け）> 生徒指導・進路指導ツール集

現場からのアドバイス〈プラスαの指導〉

苦手を克服した
同級生の体験談を集める

生徒にとって、仲間が一生懸命勉強する姿に触れることは、何よりの刺激になる。特に苦手科目から逃げずに努力する様子、そして実際に克服した体験は「自分も出来るはずだ」と勇気を与えてくれる。1学期には苦手だった教科・科目を克服した生徒の体験談や勉強法を積極的に紹介したい。生徒自身にまどめさせたり、担任が聞き取りした内容を紹介してもよいだろう。

「横に寄り添う」
リーダー層をつくる

クラスづくりにおいて、集団を引っ張るリーダーは重要だ。しかし、集団の中で特別すぎる存在であれば、中・下位層の生徒が「自分とは違う」と感じ、クラスが一体とならないおそれもある。成績は中位層だが計画的に努力を続ける生徒を褒めるなどして、他の生徒が「参考にしたい」と思える生徒をリーダー層に出来れば、生徒同士が横に並んで教え合い、学び合えるような関係が生まれる。

全員で戦うための
仮想ライバルをつくる

「受験は団体戦」という意識は、1年生のうちから持たせるように働き掛けたい。定期テストや模試に向けて、クラス（学年）としての目標を提示して「みんなで達成しよう」と雰囲気高めを心掛けたい。また、他クラスと点を競わせたり、「近隣のA高校ならこれくらいの点数だろう」などとライバル校を意識させたりするのも、集団意識を持たせるためには有効だ。